

# 廣池千九郎がモラロジーで立証しようとしたことと現代科学

立木 教夫

## はじめに

廣池千九郎は昭和3年に『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての 道徳科学の論文』(以下『論文』と略す)の初版を出版した。タイトルから明らかなように、廣池はモラロジーを新科学として構想したことがわかる。本稿では、1で、廣池が、新科学として体系化しようとしたことの核心に捉えていたものを明らかにする。2で、科学者としての廣池を示し、3で、科学の知を用いて基礎付けようとした『論文』の道徳科学基礎論における自然科学関係の章を検討し、現代科学との関係付けを考察してみたい。

## 1. 廣池千九郎の道徳的原体験

廣池は、法制史の専門家として、東西の聖賢の思想を深く研究していた。このような学問的背景を有したうえで、実際に道徳実践(廣池は人心救済と言っている)を手掛けたとき、廣池の精神に一大変革が起こったのである。

廣池は、「私は若年のころより神仏を信ずると同時に、日本及び中国の古典をはじめ、浩瀚なる仏教の教典(漢訳による)及びキリスト教の教典を研究して」いたが、「いまだその真理を自己の精神及び行為に実現して、世界の人類を開発しかつ救済するときことは、夢にも考えておらなかったことであります」と述べている。ところが、「今親しく人心救済を実行した結果、その年来体得せるところの世界諸聖人の実現せるところの信仰及び道徳の原理は、躍如として私の精神の中にその潑刺たる生命を現出したのであります」と述べている<sup>(註1)</sup>。「潑刺たる生命」をもって活躍し始めた「世界諸聖人の実現せるところの信仰及び道徳の原理」こそ、廣池がモラロジーを建設したいと願った道徳的原体験である。

では、「世界諸聖人の実現せるところの信仰及び道徳の原理」とは何であろうか。廣池は、最高道徳教育の根本原理に関する講演の中で、釈迦の教説を取り上げ、次のように述べた。

『法華経』の「一乗の法」は「天地間の無上法」である。「これを行うものはその固有の階級を超えて仏と平等になるべしと申すのであります」と説明し、こ

れは「まさしくモラロジーにいわゆる聖人正統の教説であって、宇宙自然の法則、天地の公道、人類進化の法則であるのです。しこうしてモラロジーの最高道徳はまさにこれに当たるのであります」と述べている。そして、「この教説は、元來人間は各自その祖先以来の精神作用ならびに行為の結果、天然固有の運命を有し、その運命は天然固有の階級を含んでおいて、たといかなる教育、いかなる修養をもってするも全然松を杉に更生させることはできぬものであるとなっておるところの定説に向かつて、もし釈迦如来の大乗究極の教説に基づきて修行を行わば、ついに更生のできぬことはないということを開示されてあるものであります。これ実に吾人人類が動物の域を脱して神に近づくことの出来るという一大福音であるので、現代の科学も是認するところであるのです」と説明し、「人心救済に関する世界諸聖人の真の教訓に本づくところの前人未到の真理」の一端を明確化した後、「モラロジーの原典たる『道徳科学の論文』を通覧すれば明らかにこのことを知るを得べし」と述べている。<sup>(註2)</sup>

## 2. 道徳的原体験を基礎づける諸科学

道徳的原体験の核心を書き遺したいと願ってから17年間の研鑽を経て、『論文』の初版が出版された。ここにおいて、廣池は、道徳実行による人間の更生可能性に科学的基礎付けを行ない、「最初の試み」として提示した。

その際、廣池が採用した諸科学は、「地質学 (geology)・地文学 (physical geography)・生物学 (biology)・進化論 (the theory of evolution)・発生学 (genetics)〈この中に遺伝説を含む〉・環境改良学 (euthenics)・人種改良学 (eugenics)・土俗学 (ethnography)・生理学 (physiology)・人類学 (anthropology)・人種学 (ethnology)・人種起原学 (ethnogeny)・考古学 (archaeology)・法理学 (jurisprudence)・骨相学 (phrenology)・心理学 (psychology)・社会学 (sociology)・犯罪学 (criminology)・文明史 (history of civilization)・法制史 (history of system of law)・経済史 (history of political economy)・道徳史 (history of morality)〈以上諸科学の分派に比較土俗学 (comparative ethnography)・犯罪人類学 (criminal anthropology)・犯

罪社会学 (criminal sociology)・犯罪心理学 (criminal psychology)・動物心理学 (animal psychology)・社会心理学 (social psychology)・民族心理学 (folk psychology)をはじめとして、なおこのほかにたくさんあれど、みなこの中に包括されております等」<sup>(註3)</sup>であった。

法制史の専門家であった廣池は、なぜこのような科学の知を扱うことができたのであろうか。それは、明治36年頃、法律学の師、穂積陳重博士のアドヴァイスに従い自然科学の学問的訓練を受けていたからこそ、可能となったのである。

「時に〔穂積陳重〕先生の申さるるには今後法律学を科学的に造り上げるには、自然科学の力に待たねば為らぬ事が多いとの事でありました。其当時の日本の法学者は一人もかかる事に耳を傾くる者はなかつたが、私はそうじゃと思ひ、それから先づ東大理科大学の研究室に入つて研究を始めました。主に其時に御世話になつたのは坪井正五郎と云ふ先生でありました。それから心理学、これは其当時大変なもので実験心理学と云ふものが輸入された直後の事でした。これは元良勇次郎先生と云ふ先生に就いて御指導を受けたのであります。それから医科・工科・農科・あらゆる帝大の各方面の研究室を巡回して其研究室で色々な御指導を受けて自然科学の方も一通りの事が解るやうになつたのであります。」<sup>(註4)</sup>

廣池は、モラロジーの特色を、「最近の科学的研究の結論の基礎に立って…現在及び将来の人間が古聖人の実行せる最高道徳を体得且つ実行し得る可能性あることとその実行の効果とを、歴史的及び科学的に明らかにせんとするものであります」<sup>(註5)</sup>と説明している。この文章の中に、モラロジーと現代科学の関係を捉える視点が示されている。

### 3. モラロジーと現代科学をどのように関係付けるか

廣池は、例えば、『論文』の第三、四、六章を、「最近の科学的研究の結論の基礎に立って」、どのように立論しているのだろうか。

第三章では、太陽系内の地球における生命活動、生命の連絡、人類の起源と進化、遺伝などを検討し、「古来哲学上の宿命説は、いまや科学的に立証された」<sup>(註6)</sup>と確認している。

第四章では、心理学、心身論、生理学的心理学、実験心理学、精神作用などを検討し、「意思自由説もまた現代の科学において証明せらるるに至った」<sup>(註7)</sup>とし、「たとい先天的原因是は良好ならざるも、これを回復することは自己の現在の心一つにて決定することです」<sup>(註8)</sup>と立証し、第三章の「宿命説」を「絶対的のものにはあらず」と覆していく。

第六章では、人類学として、神経と脳、人間と動物

の比較、文明史、犯罪学、骨相学などを取り上げ、「人間の道徳的精神及び道徳的行為は、ことごとくその真相が他人の心に映じて親疎の区別を生じ、これがために各人の結合もしくは分裂、幸福もしくは不幸の差を生ずることが明らかになってきた」<sup>(註9)</sup>として、「人間の精神作用」<sup>(註10)</sup>の重要性を立証している。

廣池の構想に従い、現代科学の成果を取り入れるには、少なくとも三つの方法があると思われる。

第一は、科学史的方法である。『論文』が書かれた時代に潜入し、その中で廣池の主張を正確に捉えた上で、現代科学の観点から、精密なフットノートを書いていくのである。このアプローチから、廣池の議論のうちであって現代科学に通じる論点が明確化されるはずである。

第二は、『論文』の全体構造を保持し、可変な部分を見極め現代化していく方法である。構想の中で、各章の立論目的を明らかにし、その目的に適合する現代科学の成果を採用してアップデートしていくのである。

第三は、『論文』の最高道徳論を保持し、新たに基礎論を構築する方法である。

例えば、第六章では骨相学が取り上げられている。今日、骨相学はすでにまともな科学としては認められていない。しかし、第一の方法を採用するなら、廣池の歴史的取り組みも残こせる。また第二の方法によれば、骨相学に依拠して論じようとした脳の道徳的機能は、最新の撮像技術による成果で現代化可能である。さらに、自前の科学データを産出しながら研究できる実験施設が整えば、それこそ独自の道徳脳研究を切り拓き、広く科学界に貢献しつつ、科学としてのモラロジーを推進して行けるのではないだろうか。

モラロジーを現代化するには、これら三つの方法を視野に入れて取り組む必要があると思われる。

### 注

- 1 廣池千九郎著『回顧録』廣池学園出版部、1991年、15ページ。
- 2 廣池千九郎著『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』(道徳科学研究所、1936年、53—54ページ)。この本は、『復刻版 廣池千九郎モラロジー選集二』(財団法人モラロジー研究所、1976年、307—308ページ)に再録されている。
- 3 廣池千九郎『新版論文1』廣池学園出版部、56ページ。
- 4 廣池千九郎『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』(発行者、廣池千英、1941年、17ページ)。この本は、『復刻版 廣池千九郎モラロジー選集三』(財団法人モラロジー研究所、1976年、429ページ)に再録されている。

- |                      |                        |
|----------------------|------------------------|
| 5 廣池千九郎『新版論文1』55ページ。 | 8 廣池千九郎『新版論文2』184ページ。  |
| 6 同前,250ページ。         | 9 廣池千九郎『新版論文1』107ページ。  |
| 7 同前,251ページ。         | 10 廣池千九郎『新版論文2』223ページ。 |